

山田詠美「ひよこの眼」のパースペクティブ

——〈学級〉に取り込まれたテキストの法則——

加藤 三重子

はじめに

山田詠美の「ひよこの眼」は、一九九〇年の『小説現代』一〇月号に掲載され、翌九一年一〇月に刊行された『晩年の子供』（講談社）の巻末に収録された短篇小説である。

山田詠美の「少女」を主人公にした作品としては、既に、『蝶々の纏足』（一九八七・一、河出書房新社）や『風葬の教室』（一九八八・三、河出書房新社）などが発表されていた。『晩年の子供』以降には、「少年」を主人公にした『ほくは勉強ができない』（一九九三・三、新潮社）がある。「ひよこの眼」も、こうした「子供」を主人公とした一連の作品群の中に位置すると見なすことが出来よう。

『文学界』の二〇〇二年五月号に掲載された「全調査」高校「国語」教科書掲載作品一覧」によれば、二〇〇二年現在、「ひよこの眼」は日本書籍、三省堂、第一学習社、桐原書店の四社の教科書に教材として収録されている。

言うまでもなく、小説には様々な解釈を施すことが可能である。小説の読み方は、人それぞれ、多種多様である。しかし、「ひよこの眼」もひとたび「教材」として高等学校用国語教科書に掲載されると、「学級」空間における、以下論じていくようなある法則にしたがった「読み」が優先されているように見受けられるのである^①。

それを端的に示す「事件」を、山田詠美の別の小説が経験したことがある。第一学習社は、一九九四年に発行を予定していた『新訂国語Ⅰ』に、短篇「晩年の子供」を教材候補に

挙げた。その際、文部省から「教材として不適切」との指摘を受けて、その教材化を断念し、急遽、志賀直哉の「城の崎にて」に差し替えたのである。「晩年の子供」が教科書収録の候補作品として検討された際に問題とされたのは、主人公の少女が「図書室で、手続きをせずに本を鞆に入れた。つまり、盗んだ」、「音楽室のピアノを勝手に開けて、白い鍵盤を絵の具で染め上げた。つまり、悪戯をした」、「ある日の夕方、理科準備室に忍び込んだ。そこには、授業に使う、さまざまな石があった。(略)私は、鞆の中に、丁寧、それらを入れた」という箇所であった。⁽²⁾三省堂も同様に一九九五年発行予定の『現代文』の教科書に「晩年の子供」の収録を予定したが、同じく文部省からの指摘によって、「ひよこの眼」に差し替えたということである。最近では、二〇〇一年度用の高等学校国語教科書に、「⁽³⁾はくは勉強ができない」が、文部科学省の教科用図書検定調査審議会によって不採用にされていたことが新聞に報じられた。

本稿では、「ひよこの眼」に描かれる「学校」および「学級」に着目し、それらがテキスト内でのように機能しているのかを分析する。そのことによって、「学級」空間で優先されている「読み」の法則を根本から見直し、幹生と「私」

に託されたもう一つの役割を明らかにすることを目的とする。この試みは、「ひよこの眼」の「読み」の可能性を模索することであり、同時に教育機関が学習者に働きかける抑圧を見極める作業でもある。

I 孤立する「私」

同じ作者による小説の二つ（短篇「晩年の子供」と「はくは勉強ができない」）が文部（科学）省の検定により教材化され得なかったのに対し、「ひよこの眼」が教材として認可された積極的な理由の一つを、二〇〇一年一二月に文部省から出された「高等学校学習指導要領解説 国語編」の「まえがき」から挙げることができる。

今回の改訂は、完全学校週5日制の下、各学校が「ゆとり」の中で特色ある教育を展開し、生徒に豊かな人間性や自ら学び自ら考える力などの「生きた力」の育成を図ることを基本的なねらいとして行ったものである。

（傍点引用者、以下同様）

「生きる力」の育成を手助けするものとして、「ひよこの眼」はかつこの教育的指導材料になり得るのである。「生きる力」を養う際に〈死〉を同時に考えなければならぬのであるとすれば、「ひよこの眼」は優れて〈教育的〉であると言えるのだ。

では、「ひよこの眼」が、どのように〈教育的〉であるのかを明らかにするためにその構成を確認したうえで、この小説が「私」と幹生の物語として二人がいかに差異化され、中心化されていくのか、その過程を考察していこう。

冒頭の段落と最終部の段落の記述によって、この小説は、「私」という語り手が、語り手の現在時から中学三年生当時を振り返って語っていることが明示されている。さらに、中学三年生の「私」が回想する、祭りで買ってきたひよこの死をめぐる「大分前」の時間も内包されている。また、「私」は「そのとき、すでに、好きな男には、のんきな幸せを授けたいと願うほどに大人になっていた」というように、語り手の現在時からの介入を躊躇なくやってのけ、その出来事の起こった時の「私」の心情を、大人になって獲得されたであろう言葉や分析力をもって語っているような表現も見られる。そのことが、語られる中学三年生の「私」を実際以上に〈大

人〉に見せ、「私」が級友たちとは違った存在だというイメージを作り出すことにもなっている。それが、転校生として孤立している相沢幹生への「私」の共鳴に根拠を与えるのである。

「私」は級友たちから徐々に孤立していくが、幹生が転校してきた時点では級友たちと大きく隔たつてはいない。だからこそ、幹生と担任教師のやりとりがおかしければ、担任教師を嫌っていた「私」たちは、一斉に吹き出した¹し、「私」たちは、目配せを交わし²合つて、幹生を「クラスの一員」として迎え入れたのである³。

「彼を見詰めるのは好奇心からではなかった」と言う「私」は、おそらくは自分でも気づかぬうちに、少しずつクラスメイトとの距離を広げていったのであろう。「私」はクラスの中で次第に孤立感を味わっていくようになる。そう言えば、「私」と親友の春子との会話もかみ合っていない。

「ねえ、亜紀、ちょっと聞いてもいい？」

親友の春子が、ある日、言いにくそうに私に尋ねた。

「なあに？」

「あのさ、これ、皆が言っているんだけど、あんな、相沢

くんのことが好きになったんじゃない？」

私は、驚いて、思わず自分の胸を指差した。

「私が!? どうして!？」

「だって、皆、あんたがいつも相沢くんのこと、ほおつと見てるって言うてるよ」

(略)

「そういうんじゃないよ。でも、そんなふうに見えるの?」

「うん、見える」

春子は、「だって、皆」と繰り返して「皆」を強調してはいるが、春子の持ち出す「皆」とは、春子を含めた「皆」なのである。親友の春子でさえも、「私」と対立しているのだ。しかし、「私」と幹生が学園祭の実行委員に選出される場面では、「私」と春子らとの友情を垣間見ることが⁽⁵⁾できる。

「ちよつと、皆さん、静かに。多数決で決めたいと思います。賛成の人、手を上げて」

クラス委員の言葉に、男子生徒全員が手を上げた。すると、最初は周囲をうかがっていた女子生徒も手を上げ始め

た。春子を含めた私と仲の良い数人だけが、憮然とした表情で、机に肘を突いたままだった。

この「多数決」の場面は、「多数」者に含まれない「私」の視点からの叙述である。少数者にとって、クラスの団結は「無責任」にしか思えないのだ。

山田詠美は、「ひよこの眼」より後に、『ぼくは勉強ができない』の時田秀美によつて、より直接的に「多数決」を批判させた。道で死んでいた雀を学校に持ってきた秀美が、「後でお墓を作る」から雀の死骸を机に置いておきたいと主張した時、担任教師の奥村が秀美に向かって提案したのが「多数決」という解決法であつた。

「じゃあ、こうしよう。多数決だ。このまま、死んだ雀を机の上に置いたままにしている、いいと思うもの手を上げて」

(略)

「時田、多数決は民主主義の原則だぞ。裏庭の池の側にも捨てて来なさい」

「民主主義って、くだんねえや」

奥村は、秀美が呟いた言葉を無視した^⑥。

時田秀美の主張は「多数決」や「民主主義」という名の下に退けられたのである。教育システムが国家体制に組み込まれている以上、戦後の近代教育の背景には民主化推進の時期と高度経済成長期が深く関わっていることは言うまでもない。佐藤学は、一九四一年以降の国民教育体制が、画一的な教育、官僚的な教育統制、そして形式的な平等の理念を打ち出しながら、内部における選別、序列化を構成していくシステム、すなわち、「暴力装置」として機能した管理と抑圧のシステムであったと指摘している。^⑦「ひよこの眼」の「私」と幹生が多数決で実行委員に選ばれる場面は、まさにこうした「暴力装置」としてのクラスの光景を照射しているのである。

だが、「ひよこの眼」において、「多数決」という解決方法は、「私」と春子らの〈友情〉や「私」の〈恋愛〉という、まだ明瞭でさえない感情を前面に出すことによって、「暴力装置」であることが後景に押しやられている。ここに、「ひよこの眼」の戦略の一つがあると思われる。「ひよこの眼」は、山田詠美作品に通じるマイナスイメージとして描かれる〈学級〉空間が後景化されているのだ。それは、『はくは勉強

ができない』の時田秀美のように、露骨に「多数決」や「民主主義」を否定させることなく、むしろその多数決という「暴力装置」によって、「私」と幹生を接近させ、「私」と幹生との関係が〈恋愛〉へと発展していくように読者を誘導していくことで可能となっている。

〈学校〉に浸透した国家システムを根底で批判しながら、〈学校〉で展開される〈友情〉や〈恋〉などの光景を前景化して描いた小説として成立しているのが「ひよこの眼」なのである。

〈学校〉や〈学級〉では、教師と生徒の間に多少なりとも〈権力〉を軸にした利害関係が存在するのが現実である。だから、「私たちのほとんどが、担任教師を嫌っていた」としても、中学三年の「受験を控えた生徒たち」は、たとえば内申書や指導要録のように生活態度までも点数化される制度がある限り、正面から教師の鼻を明かしたり、嫌っている態度を表明することはできない。そういう状況で、教師の言葉を聞いていないばかりか、注意されても妙に超然としている幹生は、生徒たちにとって、担任教師を小馬鹿にしたかのような〈勇氣〉ある人物として関心を集めたのである。生徒たちが見ていたのは、幹生個人ではない、あえて言えば一人の

「英雄」だとも言える。

しかし、幹生の様子は、幹生の「目」に「懐かしい気持」を感じた「私」だけには、一個人として注目されていたのである。

Ⅱ「目」と「瞳」

転校生である幹生が「異人」の雰囲気を漂わせているのは当然のことではあるが、それを「読者」に対して強く印象づけるのが「私」による幹生の「目」と「瞳」の描写である。

「私」は幹生の「上の空」の様子や、「何かを見ている」様子を感じ取っていくわけだが、当初、それは、「私」だけが特権的に気づいていたものではなかったはずだ。担任教師に自己紹介を促された時の幹生は、「周囲に解らせてしまう程に、上の空だった」のである。しかし、それをあたかも「私」のみが注目したかのような印象を与えるのは、幹生のそうした様子やそれに気を取られた生徒たちの様子が、教師の「おい、相沢、おい、聞いているのか!!」という威圧的な発言によってかき消されているからである。つまり、生徒たちは、幹生の目に「懐かしい気持」を抱いた「私」とは違って、自分の

ちが「嫌っていた」担任教師に対して、「妙に超然とした雰囲気」を保ち続けている幹生の姿に、権力関係の破壊者を見るのである。

「学級」で主導権を握っている教師と生徒間の「権力関係」を崩してしまう幹生は、「落ち着いていた」、「妙に超然とした」、「ひょうひょうとした様子」と形容される。対して、教師は「顔を赤らめて、咳払いを」するという、滑稽味さえ帯びた方法で、幹生の注意を自分に向けなければならなかった。ここに描かれる教師ははつきりと「権力関係」の下位に位置づけられた負のイメージを担わされている。このような小説が「学級」空間で読まれるという事実注目しなくてはならないであろう。しかし、繰り返すが、実際の「学級」空間で「ひよこの眼」は読者（「学習者」に「恋愛」小説的なイメージを与え、教師に対する負のイメージが物語の周縁に位置するように仕組まれているのである。それが「ひよこの眼」なのである。この小説は幹生と「私」を中心化していく語りにより、三省堂の指導書にもあるように、「初恋」という物語の生地に、死をめぐる「私」の独特な心理や感性が模様として縫い込まれた心理小説^⑧となってしまうのである。

幹生の「澄んだ瞳をまばたきもせず大きく見開いて何か

を見ている」様子は、「いつも真剣に何かを見詰めている」様子へと移り、最終的に、かつて祭りで買ってきたひよこが死にゆく様、つまり、「自分の死を予期しているかのように澄んだ瞳を見開いていた。ただ一点を見詰めながら、私の手の上で、静かに、そのときを待っていた」という描写と交差することになる。

澄んだ瞳をまばたきもせず大きく見開いて何かを見ているようだった。何を見ていたのかは、まったく解らない。私には、彼が、空気中にある彼自身にしか見えないものを見詰めているように思えた。つまり、彼は、(略)周囲に解らせてしまう程に、上の空だったのだ。

彼は、いつも上の空のように見えた。上の空という言葉の方は正しくないかもしれない。彼の瞳は、いつも真剣に何かを見詰めているようだったから。けれど、その何かは実在するものではないようだった。空気の中に、何か、彼にとつての重大なものが浮かんでいるかのように、彼は一点を見詰めているのだ。

それでも、私は知っていた。私と言葉を交わしていないとき、幹生がやはり、まばたきもせずに何かを見詰めているのを。

彼の瞳には、相変わらず涙の膜が張っているように見える。けれど、それは、決して上の空の涙ではない。

何かを見詰めている様子や、「上の空」の様子は、〈予感・予測〉的な立場から〈確信・断定〉的な立場へと移り、「死を見詰めている瞳」に接続される。これに伴って、「私」の抱いた「懐かしい感情」も変化しながら、幹生に対する「好意」が増す過程と重ねられる。冒頭に「その男子生徒の目を見た時、何故か懐かしい気持に包まれた」とあったのが、「懐かしい気分を忘れさせた」、「その瞳を懐かしいとは思わなかった」という段階を経て、最終的に「懐かしいなんて嘘だ」と否定されるのである。くどい程にそれらの過程を叙述することによって、「ひよこの眼」は、幹生の何かを見詰めている「目」や「瞳」、つまりは〈生／死〉の問題を一義的に位置づけているのである。

桐原書店の指導書は、「生」や「死」といった作品の主題

とは別に(略)少女の恋愛感情の巧みな表現も、この作品を魅力的なものにしている」と、へ生/死の問題を「主題」と見なしている。また、この桐原書店の指導書では「恋愛感情」が自明のものとされてもいる。たしかに、幹生に対する感情について「自分に訪れた初めての恋」という「私」自身による分析がなされているが、「私」は、はじめから幹生の「死を見詰めている瞳」に魅せられてしまっていたのだ。同指導書には、クラスで恋の噂がのぼったときの「自分があまりにも無防備であった」という記述について、「私」の中には(本人が意識していなくとも)、すでに「幹生」への恋心が芽生えていたことは確かであろう」ともある。しかし、「私」の抱いたその感情にはへ死への共振があることを見落としてはならないだろう。

幹生の具体的な容貌についての言及がなされずに、幹生の「目」と「瞳」の描写ばかりが繰り返しなされているのは、「私」だけではなく、幹生もまた「目」を意識する人物として造形されているからである。「教師の言葉などまったく耳に入れて」いなかった幹生は、「他の生徒と積極的に言葉を交わそう」ともしなかった。しかし、「私」が噂の誤解を解こうとすると、「知ってるよ。でも、君、いつも、おれのこ

と見てたでしょう」と言う。幹生は、視線に敏感な人物なのである。だからこそ、「皆が言うこと気にするなよ。たいしたことじゃないよ、あんな噂」と言い、言葉による噂に重きを置かない。

では、「私」の幹生を見詰める行為は、視線に敏感な人物であった幹生にどのように作用したのであろうか。鷺田清一によれば、「他者と眼ががちあつたときに、じぶんの視線がひきつたり、凍りついいたりするような感じがともなうのは、他者の視線がじぶんの意識の内部閉鎖を不可能にしてしまうから」だといふ。幹生と「私」は視線をがち合わせることこそしていないものの、幹生は「私」が見詰めていることを十分承知しており、「意識の内部閉鎖」を知らず知らずのうちに解き、「私」を意識するようになっていったのである。

「私」が「次第に、彼が気を許し始めているのを感じ」るようになっていったとあるのは、幹生が「先が見えないままひとつのへ共同の現在」へとじぶんの存在が引きずりだされ、そうしてその現在という場に身をさらしつづけることを強いられ(鷺田)ていたことを示している。

しかし、幹生は自分の存在をへ共同の現在へと引きずり出されないように抗っている。幹生が現在と向き合うことは、

〈死〉と向き合うことになるからである。だから、「私」と幹生の関係が深まっても、幹生は「相変わらず、自分の領域を守り続けていて、そこに、私を入れることはなかった」のである。それは、公園で、「相沢くんって、大人っぽいよね。

なんだか、私たちよりも、ずっと先を行っているみたい」と言った「私」に、幹生が投げやりな様子を見せたことから窺える。実際、幹生は〈死〉を予期している分、同級生たちよりも「ずっと先を行っている」のだ。「あの人は〈死〉を引用者注」予感しているのだ」と言われる幹生は、だからこそ公園で「吐く息が白くなって行くことは、体の中があったかいつてことだもんな」と、今の〈生〉を確認するように言い、ことさらに、「これから」の文化祭や受験を話題にしなければならなかったのである。

幹生が「これから」のことを話題にしたとき、「私は、涙ぐみそうになった」と記されている。この叙述について、桐原書店の指導書には「幹生」が自分と出会ったことで、将来に対して多少でも目が向くようになったことに感激しているのである」とある。だが、「私」が幹生の「死を見詰めている瞳」に惹かれていたとするならば、これは、幹生が「これから」のことを話題にしながらも〈死〉という避けがたい

運命を受け入れている、そのような不条理さに「涙ぐみそうになった」のではないか。

しかし、「私」の〈死〉に対するシンパシーは、〈学級〉空間では忌むべきものとして、〈恋〉へと転化して読まれる。

「私」と幹生が〈学級〉空間において異質な立場にあったことは先に触れた。「私」と幹生の交流は、もっぱら学校外において展開されていく。たとえば、「私」と幹生の〈恋心〉の相互確認がなされるのは夕暮れの公園である。そのことで、「私」と幹生の〈恋愛〉は学校外で行われているという印象を与えられる。二人の〈恋愛〉は〈学級〉空間の外での出来事であるかのような印象を与えるのだ。この設定は、生徒たちと同質性を求める〈学級〉空間の暴力性を炙り出す働きをするだろう。

事実、実際の教育現場である〈学級〉空間では、二人の〈異人〉たちの〈死〉への共感を示す〈危険〉な〈恋〉を覆い隠す。桐原書店の教科書には「学習の手引き」に、「人生に対して礼儀正しい人」とは、「幹生」のどのような態度をいったものか、説明してみよう」という問が設けられている。同書店の指導書には、その解答の解説として、「自らのつらい境遇を「諦観」していた「幹生」の態度が、「私」との恋

によつて交わりつゝあつたことに目を向けさせたい」とある。——そうなのである。この問と解説に象徴されているように、実際の〈学級〉空間では、「ひよこの眼」を恋物語と見なす〈教材〉である限り、二人の〈恋〉は、〈死〉を否定し、〈生〉への力を肯定する〈安全〉な営みとして読まなければならぬのだ。

幹生もひよことともに、避けられない〈死〉という運命を受け入れる存在である。だが、ひよこは、妹によつて「最初っから、生きる気なんてなかったよ」ということばを浴びせられる。一方、幹生は「あの公園で、確かに生きようとしていたのに」、「私の手をきちんと握ったのに」、「人生に対して礼儀正しい人だったのに」と語られて、生きようとしていた姿勢が強調される。〈死〉を見詰めていた幹生の目は、「私」の手の中で死んでいったひよこの目と通じてはいるものの、完全に一致することはないのである。物語は〈生〉と〈死〉を軸にして進められていく。〈読者（≡学習者）〉は、先にあげた桐原書店の指導書にもあったように、〈生／死〉の問題を〈主題〉の一つとして読むように導かれているのである。

ここで特に留意しておかねばならないのは、幹生の「目」や「瞳」に〈死〉を読みとるのは「私」であるということだ。

かつて、自分の手の上で死んでいったひよここと幹生をだぶらせているのは、他ならぬ「私」なのである。幹生の目に懐かしさを感じた「私」は、無意識のうちに〈死〉に対するシンパシーを持っていたと言える。幹生の主体を無視して、幹生の「瞳」に〈死〉という運命を与えたのが「私」なのである。「ひよこの眼」は、〈生／死〉の問題や〈恋愛〉という感情を前面にすることによって学校への反発を背景化し、検定を通過したと言えるであろうが、それはタナトスを漂わす物語でありながら、教材として認可されたことを意味する。

Ⅲ「ひよこの眼」の可能性

「私」の幹生に対する感情は、幹生の目に抱いた懐かしさを解明したいという思いから始まり、やがて、「恋」に変化していったかに思われたが、幹生の目の意味に気がつく、「最初から、彼のあの目に引かれていた」と言う。「私」は、自分が幹生の「死を見詰めている瞳」に我知らず惹かれていたことに気づき、〈死〉を〈恐怖〉の対象にし、「憎らしいことだ」とは思うが、「ひよこの眼」においては、決して〈死〉を否定してはいないのである。

幹生は、「たしかに生きようとしていた」人物である。しかし、その幹生は、「私」によって「死を見詰めている瞳。あの人は予感しているのだ」とされた。つまり、幹生の

〈生〉の基盤には、幹生自身が既に「予感」している〈死〉があるのであって、〈死〉は〈生〉の対極に位置するものとされていなのである。表題の「ひよこの眼」はニワトリになる前の小さな存在を暗示しつつ、一方で中学三年生の幹生を「大人っぽい」人物として造形し、幹生が〈死〉に近い存在であることをほのめかしている。

このことは、「自我の形成」というテーマを浮かび上げさせることにもなる。たとえば、三省堂の指導書には、「この作品を読むことは生徒たち自身の生のあり方を深く考えさせるための場を保障することになるだろう」とある¹³⁾。

ここで、言及しなければならないことがある。それは、「ひよこの眼」における幹生の衝撃的な〈死〉(便宜上、ここではそれを〈悲劇的な死〉と呼びたい)と、たとえば、漱石の「こころ」に代表されるような主体性のある〈死〉の違いである。〈悲劇的な死〉は、「私」が幹生の〈死〉を見詰めていた目に惹かれたように、〈読者〉(＝学習者)たちに〈死〉に対する共感を目覚めさせてしまう可能性がある¹⁴⁾。だからこ

そ、「ひよこの眼」は〈生〉の力を生徒たちが享受する〈学級〉空間では、〈安全〉な恋物語として読まなければならないのである。

「ひよこの眼」は間違いなく、山田詠美の一連の作品における〈学級〉や〈学校〉に共通するマイナスイメージを書き込んでいる作品である。だが、それを後景に押しやることによって、「私」と幹生の〈恋愛〉を読むことを通して、学習者たちの〈自我形成〉をなす〈安全〉な小説として成立している〈教材〉であると言えよう。

つまり、〈教材〉としての「ひよこの眼」には、〈死〉を否定し、他者との関係から形成される〈自我〉のあり方を考察するといったテーマ設定がなされるのである。しかし、この小説は、文部省の目指した「生きる力」を養うという意図とは逆に、「私」の〈死〉に対するシンパシーを読みとることができる〈反教育的〉な教材と言えるのではないだろうか。

なぜ、短篇「晩年の子供」が検定にひっかかり、「ひよこの眼」は教材として認可されたのか、今一度考えてみよう。

「晩年の子供」も「ひよこの眼」も、〈学校〉空間を〈神聖〉な場所として崇めてなどいるわけではない。両作品の本質は同じである。ただ、「ひよこの眼」には、「晩年の子供」と違

つて、直接的に「学校」空間で「盗み」や悪戯を働く場面が描かれていないために、「安全」な「恋愛」小説、「自我形成」に役立つ小説として読まれるように仕組まれているに過ぎないのである。もちろん、山田詠美は、「ひよこの眼」を教科書に載せることを目的として創作したのではない。ここで問題にしたのは、あるテキストが「教材」として「学級」に取り込まれた場合、「学級」空間でどのような「読み」の法則が働くかということだ。

転校生である相沢幹生は、最初から「異人」として登場した。「平等」であること、「普通」であること、「均一」であること——これらこそが、近代国家の教育体制であった。この教育体制は、内に向かっては選別と序列を構成していくシステムとして機能し管理と抑圧を伴った。「学校」や「学級」という場を設ける以上、「統一性」を帯びずに、内部の序列化や管理を伴わない共同体や集団は存在し得るのだろうか。「ひよこの眼」という小説は、そこからの解放の可能性を持っているように思われる。

「異人」の幹生は、学級という共同体の序列や管理の手から免れた。幹生は、自己の内部に「死」という他の級友とは「異質」なるものの存在を認め、それを「生」の基盤とし、

自己を「学級」の「統一」の秩序外に置いたのである。幹生の存在は、「異質」であるとはどういうことを示唆していたのだ。その幹生に「変な奴」と言われた「私」は、「幹生とつき合っている」という多数者の認識を言い訳もせずに受け入れ、「異人」としての立場を引き受けるようになっていった。つまり、誰もが「異質」な存在になり得る可能性があることを示していたのである。

もつとも、「多様性」という語について言えば、教育機関はそれを一概に否定しているわけではない。教育基本法的一条に「教育は、人格の完成をめざし、平和的な国家及び社会の形成者として、真理と正義を愛し、個人の価値をたつとび（略）心身ともに健康な国民の育成を期して行わなければならない」とあるのだ。この第一条に関しては、ナシヨナリズムや愛国心、さらに戦前の教育勅語に関連しても多くの議論が展開されており、近年では教育基本法の「改正」に関しての議論も盛んに繰り広げられている。これらは重要な問題であるが、本稿で特に注目したいのは「個人の価値をたつとび」というフレーズである。これは、一見、学習者の「個性」を重視しているかのように受け取ることが可能である。だが、ここで言われていることは、もはや、「個性」を重視

するという域を超えて、パラドックス的にさらなる画一化を押し進めているのではなからうか。すなわち、学習者の「個性」を重視するのではなく学習者の「個性」を教育するということに容易に直結するのである。教師が学習者の「個性」を評価するならば、それは当然「個性」の序列化を伴う。「人格」や「個人の価値」という学習者の内面に属するものまで教育システムが管理するのである。大内裕和が指摘しているように、「権力による命令は「個性」や「意欲」といったより「民主的」な装いをもちながら、秩序が内面化され、人間の規律化・規格化はより強化・全般化されているといえる」のである¹⁸。

「ひよこの眼」は、幹生と「私」の交流を描く一方で、山田詠美が『風葬の教室』において「いじめ」をテーマとして問いかけた同質化を軸としない「学級」空間の新しい在り方を模索する可能性を示しているように思われる。「学級」空間の教師と生徒の「権力」関係を相対化し、「多数決」などの「戦後民主主義」の負のサイクルを後景に隠しながら、同時にそれらを確かに批判するという「ひよこの眼」の戦略は成功しているのではなからうか。現に、「ひよこの眼」は「教材」として成立しているのだから。

「ひよこの眼」が、戦後教育の批判という形で「学級」の在り方に一石を投じ、文部省の目指した「生きる力」とは裏腹のタナトスを漂わす小説であるという二重の意味で、まさに「反教育的」な作品であるという認識を受け入れることから始めよう。そして、さらに教師が学習者の「個性」の序列化を放棄したとき、はじめて学習者に「読み」の多様性を示唆できるのではないかと考えられるのである。

注

(1) 「ひよこの眼」の「教材」としての作品価値を論じた論考として、牛山恵「山田詠美「ひよこの眼」の教材価値」(田中実・須貝千里編『新しい作品論』へ、「新しい教材論」へ6)一九九九・七、右文書院)、五十嵐哲也「教育の場にとりこまれた「ひよこの眼」——山田詠美「ひよこの眼」の教材化をめぐる一考察」(『学芸国語教育研究』一七号、一九九九・一〇)等がある。

(2) この経緯については、「教科書検定で落とされた山田詠美さん頭の固い文部省を嘆く」(『週刊文春』一九九三・七・八)に詳しい。

(3) 「ぼくは勉強ができない」の本文中の「馬鹿」という表記が、「特定の児童に対する教師や他の児童の差別的な言動」とされ、「心身の健康・健全な情操の育成について必要な配慮を欠いている」との意見をつけられた(『毎日新聞』二〇〇二・四・一〇)。

(4) 牛山恵は、テキスト前半部で使われる「私たち」という人

称について、「転校生を迎える中学生の類型化が行われたのである」という指摘をしている(前掲論文)。

- (5) この場面について、「女子生徒たちは、黙ったままの私に同情して、彼らに反対しようとしていた」のだが、「同情」してくれていると感じたのは「私」の感じ方にすぎない。先に、「私と仲の良い女の子たち」が、「結構、素敵だね、相沢くんて」、「大人っぽい気がする」という会話をしていたことや、後に出てくる「君のファン、結構多いよ」という「私」の発言を思い併せれば、幹生が「私と仲の良い女の子たち」の間で人気を得ていたことが窺える。そうであるならば、「私」と幹生が実行委員に選ばれることに、「嫉妬」にも似た面白くない感情を抱く女子生徒もいたと読むことも可能である。その場合、「私」と幹生が、単にクラスの大勢から浮き上がっているという以上に、孤立化はさらに強度を増して、春子ら「仲の良い」女子生徒たちからさえも孤立している「私」の〈学級〉での位置が示されることになる。

- (6) 引用は新潮文庫「ぼくは勉強ができない」(一九九六・三)に拠る。

- (7) 栗林彬との対談「教育の脱構築・国民国家と教育」(『現代思想』一九九六・六、六〇～七七頁)

- (8) 現代文編修委員会編「指導資料 第4分冊 現代文」(一九九五・四)。以下、本稿では、「指導資料」を「指導書」と呼ぶことにする。「三省堂の指導書」と記述した場合、これに拠っている。

- (9) 「探求国語Ⅱ【指導資料】第2分冊 小説・詩歌編」(一九九九・二)。以下、「桐原書店の指導書」と記述した場合、これに拠っている。

- (10) 「聴く」ことの力―臨床哲学試論(一九九九・七、ティビ

ーエス・ブリタニカ)、六二～六三頁。

- (11) 神田由美子は、「亜紀と(略)幹生の接点を、〈教育〉や〈家族〉というアイデアオリギーの存在しない開かれた空間である街路と公園に設定」したと指摘している(「ひよこの眼」、前掲『新しい作品論』へ、〈新しい教材論〉へ「6」に収録)。

- (12) 表題の「ひよこの眼」は、他の何ものでもない幹生の「眼」であり、祭りで買ってきたひよこの「目」でもない。本文中のひよこに、「目」という表記しか与えられないのはこのためであろう。

- (13) 同様に、桐原書店の指導書にも、「だれもが自我形成の時期に、必ず一度は『死』というものにかかわっているものである」、「この作品を読むことを通して、『死』というものをとらえ直すことで、『生』というものを考え、自らの人生を、あるいは現在を見つめ直す契機となることを期待する」とある。

- (14) 高橋祥友は、一九八六年一月の中学二年生男子生徒の「いじめ」を苦にした自殺、同年四月の女性アイドル歌手の投身自殺、その二つに伴う連鎖的な自殺を分析している。この二例の自殺は、マスコミがセンセーショナルに報道したので記憶に残っているだろう。マスコミ報道の結果、八六年の未成年者の自殺は、その前後の年と比較して約三〇パーセント増加した。この連鎖的な自殺現象は、発端となる「死」が自殺でなくとも、不審死、事故死、殺人などの悲劇的な「死」がきっかけになることもある。連鎖的な自殺について、「小説や映画といった、フィクションに描かれた自殺の影響でその後、複数の自殺が誘発された例さえ報告されている」ともい

う。高橋によれば、「とくに思春期では、他者の悲劇に自己を同一化してしまう傾向が強い」という（『自殺のサインを讀みとる』（二〇〇一・六、講談社）。

- (15) 石原千秋は、山田詠美の「晩年の子供」が検定にひっかかった「表向きの理由」を、喫茶店の絵を盗み出す場面が描かれている宮本輝の「星々の悲しみ」との比較から、〈学校〉という空間の中で、「盗み」が行われていることにあると指摘している（『大学受験のための小説講義』、ちくま新書、二〇〇二・一〇）。

- (16) 山田詠美は、『ほくは勉強ができない』が教科書に不採用にされた件について、自ら「別に載せてもらわなくても構わない」（『毎日新聞』二〇〇二・四・一〇）とか、「載せてくださって頼んだわけじゃないから別にどうでもいい」（『文芸学』二〇〇二・七）という発言を残している。

- (17) 教育基本法改正についての現在の論議について知るには、高橋哲哉他「教育基本法「改正」に抗して」（岩波ブックレット六二六、二〇〇四・六）に簡潔かつ様々な立場からの意見が寄せられている。

- (18) 酒井隆史との討議「教育と社会」（『現代思想』二〇〇四・四、四八〜六九頁）

* 「ひよこの眼」の引用は『晩年の子供』（一九九一・一〇、講談社）に拠る。ただし、ルビは全て省略した。また、本論中の傍点・傍線等は全て引用者による。